

東京大学大学院医学系研究科神経病理学分野

齊藤 貴志

日本生化学会会員の皆様にはいつも大変お世話になっております。2026年2月1日から東京大学大学院医学系研究科神経病理学分野の教授を拝命いたしました。この度は研究室紹介の機会を頂きまして、心より感謝申し上げます。

私は熊本大学薬学部を卒業後、修士課程まで高濱和夫先生、甲斐広文先生のご指導のもと熊本で過ごしました。その後、大阪大学大学院医学系研究科の谷口直之先生のもとで博士課程を修了し、学位を取得しました。その頃に、祖母が認知症を発症したことを機に、認知症の基礎研究に携わるべく、理化学研究所脳科学総合研究センターの西道隆臣チームリーダーのもとでアルツハイマー病に関わる研究をはじめました。2019年7月に名古屋市立大学大学院医学研究科脳神経科学研究所認知症科学分野の教授として独立し、この度、東京大学へ異動して参りました。岩坪威先生の後任として、歴史ある神経病理学分野の6代目の教授としての重責に身が引き締まる思いです。

我々の研究室では、認知症・アルツハイマー病を中心に、神経変性疾患の発症メカニズムの解明と、そこから見いだす予防・治療・発症遅延のための創薬研究を行っています。研究の中核となるのは、私が理化学研究所在籍中に開発した次世代型アルツハイマー病モデルマウス（*App*ノックインマウスおよび*MAPT*ノックインマウス）です。これらのモデルは、従来のトランスジェニックマウスの問題点を克服したものであり、世界中の研究者に広く利用されるに至っております。しかし、これらモデルは現時点では前臨床性モデルに留まっており、病理・病態を一個体内で完全に再現すべく研究に取り組んでおります。

その鍵になるものとして、近年特に力を入れているテーマの一つが、グリア細胞と末梢免疫系との神経変性病態連関を明らかにすることです。これまでの認知症研究は、脳の疾患として研究が進められてきましたが、脳と末梢要因、ひいては外界環境も含めた相互作用に着目し、全身性の疾患と捉え直して研究を進めていく必要性を強く感じているところです。成果の一つとして、2026年4月の「生化学」にて“みにれびゅう”を掲載していただきましたので、

そちらも併せて読んでいただければ幸いです。さらに、認知症と脳卒中の複合病態（疾患連関）や、岩坪先生が進めてこられたパーキンソン病の病態解明に資する研究なども引き続き取り組んでいます。

現在、研究室には講師1名、助教2名、特任研究員1名、大学院生（博士課程）4名、秘書1名、研究補助員1名が在籍しています（写真）。名古屋市立大学時代からともに研究を進めてきたメンバーに加え、これまで神経病理学分野で研究を進めてきたメンバーも合流し、アルツハイマー病研究、パーキンソン病研究、脳卒中研究と多様なテーマを展開しています。研究室は多才なバックグラウンドを持つメンバーが協力して研究を進める場となっており、国内外の研究者との共同研究も活発に行っています。引き続き国際的な研究水準の維持・向上に努めてまいります。

認知症・神経変性疾患研究、疾患基礎研究、創薬研究に興味のある学生・大学院生・ポストクの参加をお待ちしています。詳細は研究室HP（<https://ncs-saitolab.com/>）をご覧ください。私までお気軽にご連絡ください。まだ発足まもない研究室ですが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



研究室メンバー（2026年初夏）